日本カトリックが凝縮
～長崎巡礼・最終回～

昨年八月、四泊五日で上五島、佐世保、長崎の外海（そとめ）地区を旅した。今年二月は三泊四日で長崎市内を訪れた。

異文化との交流の地であった長崎県。日本全体が貧しかった明治から昭和初期にかけてこの地で外国人宣教師が信仰を伝えただけでなく、教育、福祉、医療に貢献した足跡が各地に残っている。

長崎は日本のカトリック教会の歴史が凝縮されており、書けばきりがないほどだ。今回までにすでに五十二回書いた。ひとまず長崎巡礼は今回までとする。

長崎の旅で一番考えさせられたことは「信仰」とは何かということだ。

日本のキリスト教弾圧の象徴ともいえる長崎西坂での二十六人の処刑。わざわざ京都から長崎まで連行して処刑したのは、当時のキリスト教信仰の中心が長崎であったことの表れであろう。

六人の外国人宣教師と二十人の日本人信徒の中には十五歳未満の子供が三人いる。その一人、十四歳のトマス小崎の銅像が城山教会にある。その台座にあった言葉を書き留めて帰った。

「母上様、この世の生命は嵐の前の灯のようにはかないもの。天国の幸福は永遠に続くのです。何よりもれいこんを大切に正しく生活し、弟と一緒に必ず天国においで下さい。まっています。

一五九七年二月五日」

この手紙を残してこの日に父ミゲル小崎と一緒に処刑された。わずか十四歳の子供の辞世の手紙に見られる、このゆるぎのない信仰心はどのように育まれたのだろう。

キリスト教信仰は、限りあるこの世の命を失っても神の国の永遠の命に復活できるという「復活信仰」である。

パウロや十二使徒がイエス・キリストの福音を伝えた時代の庶民やトマス小崎らの殉教者の生きた時代の庶民は貧しく抑圧されていた。そんな時代にイエスの神の国への福音が生きる大きな希望であり、限りあるこの世の命を失っても、永遠の命に希望を託したことは、理論的には理解できる。しかし殺されてもとなると…。さらに、個人的人権が認められているとはいえ、我々現代人も限りあるはかない命であることには変わりない。なのに神離れ。

旅をしながら考えたことは、当時は家族共同体、地域共同体の中で何よりも「信仰を第一」として生活していたように思える。

地域共同体といえば長崎県内に三十八の修道院がある「お告げのマリア修道会」が頭に浮かぶ。先日、代表のシスターから小坂井澄著「お告げのマリア～長崎女部屋の修道女たち」という文庫本が送られてきた。読むと、この修道会が最初から修道会として活動したのではなく、当時の貧しい地域で捨てられた子供の養育からスタートしたことがよくわかる。

ノンフィクション作家が書いた「お告げのマリア」

代表の若き女性四人の中の岩永マキの戸籍には養子として二百九十四人が記載されている。四人から始まった活動は外国人宣教師の力を借りながら長崎県各地に「女部屋」として広がり、それが後に修道会となった。

読みながら、自分の信仰は知識であり、生活や行動に連動してないことを痛感させられたのである。

◇　◇

前回の通し番号と見出しが誤っていました。正しくは㉖④、「如己堂」です。お詫びして訂正します。（編集部）

二十六聖人の一人、14歳のトマス小崎